

千代若殿とぞ申しける。此の若、観音の申し子なれば、世の常の御姿にてまします、父母の寵愛浅からず。

御家相伝の侍には、小和田甲斐守・中臣左衛門尉・大内越前守・長谷部隼人、其の子隼人之助・二男隼友・三男宮内之介、千代若のめのと三浦左衛門尉、何れも一人当千の剛の者なり。上を敬い下を撫で、武道忠義の道を尽くし、この殿の御威勢敬わざるはなかりける。

九郎愛吉、反逆の事

太郎安部実季公、御子息九郎愛吉殿、御父御他界の後、母上に付き添い参らせ月日を送り給いける、御成人あるこそめでたけれ。しかれども九郎殿二十に及び給えども愛季殿、終に湊を渡さず、有るか無きかの風情なり。

ある時、御家の侍達を召されければ、何事やらんと御前に畏る。其の時、愛吉仰せられけるは、方々これへ召す事は別事にあらず、愛季、父太郎相果てしより以来、己が心のままに振舞う事、道にあらずと思ふなり、忝くも九郎こそ秋田の大將たるべきに、御父御他界の節は、我、若年なればこそ愛季頼み給うなり、今、我成人するといえども我に渡すことなし、その上、政無道にして正しからず、彼是もつて口惜しく思ふなり、我、この度、謀叛をおこして愛季を討ち取り、父

の跡を継ぎ国の政事を取り行いたく思ふなり、方々に、と仰せける。

一座にあり合う人々には後藤兵部・大井将監・大久保藏人助・後藤采女、進み出、仰せ御尤に存じ奉り候、我々とても無念に存じ奉り候えども御当代愛季殿、誠に月支が月を還すほどの御勢いに候えば、何と思し召し候えども御一人力にては、なかなか叶えがたく存じ奉り候、左様に思し召し立たせ給わば、浦の大將兵庫守と申すは名代無双の勇士なり、これを御頼み然るべし、と申し上げる。

愛吉聞こし召され、左あらば申し越し候え、とて林野喜三太、御使者にて浦の城へぞ急ぎける。浦にもなれば案内こうて内に入り対面し、我君愛吉仰せられけるは、この度使者をもつて申し進め候段、貴公に少々内談の旨あり、某、御使に参り候と、さもいんぎんに申しける。

盛長、この由聞くよりも何事やらん、と喜三太打ち連れ湊へこそは参られける。九郎殿御悦びは限り無く、こなたへ御入り候え、と一間成る所へ召し寄せられ、今度、貴方これまで申し入る段、別の義に候わず、そもそも九郎初めて思い立つ大事あり、さても叔父にて候愛季は、政事無道、心のままに振舞い前代未聞の次第なり、しかるに愛季を討ち取り、我父の跡なれば湊の城に移りたく思ふなり、その儀いかがと申すに、先年父にて候太郎殿、落命なされ候時、御遺言なされ候は、九郎二十歳に成るならば湊を渡し候え、と御頼みなされ候なり、我すでに二十に余れども終に渡す事